

鳥取県総合情報誌

vol.132

とっとり Now

Winter 2021

巻頭
特集

愛あふれる 「芸術写真の神」

昭和を翔けた写真家・塩谷定好



あーとの森	陶芸 森 和之	2
巻頭 特集	愛あふれる`芸術写真の神、 昭和を翔けた写真家・塩谷定好	4
開運おかげ詣で 因幡と伯耆の神社	客神社 (南部町)	16
ここにこの人 Human Life	整備士 谷口 剛史	17
きりぎり匠人 継承の技が語る世界	バンブーロード職人 石田 秀登	20
企業紹介	ドリーム・オンライン株式会社	22
TOTTORI おもしろ発見手帖	鳥取県農業試験場	23
VIVA! トットリLIFE 輝くIUターン者たち	森のガレージキノビ経営 (智頭町)	24
Voice・読者プレゼント・編集後記		26

□「特集」「カメラアイ」「鳥取のうま味」は休みます。



●表紙イラスト●

池平 徹兵

いけひら・てっぺい

1978年福岡県生まれ。鳥根大学卒。
東京オペラシティアートギャラリー
project N、岡本太郎現代芸術賞展、
VOCA展などに出演。今回は雪の三朝
温泉と、冬の味覚の松葉がに。カニ
とピアノを合わせ、食材と生き物の
間を心が行き来するように描いた。

『とっとりNOW』が毎月届く
「ふるさと来LOVEとっとり」
会員を募集中!

入会
年会費
無料



巻頭特集：塩谷定好《村の鳥瞰》：鳥根県立美術館蔵



『青白磁錐』(磁器、高26.0×径19.5cm)



文／角秋勝治
写真／田中良子

る り ゆう せい はく じ
瑠璃釉と青白磁を二本柱に、シンプルで清らかな作陶に励
む森和之さん。紺碧の海を思わせる磁器が目立つが、本人の狙
いは「あくまでも磁器の持つ素材の白さを際立たせるため」と
か。青と白の対照的な釉薬の器は、純粋な思考が競い合う煌め
きであったのか。

大阪芸術大学を卒業して帰郷し、大学の先輩で白磁作家の
前田昭博(※1)さんに師事した。指導は一言「自分らしい仕事を
追求すること」。郊外の青谷町に窯を開き、「矢を放つ瞬間の弓
矢のような緊張感と美しさ」に憧れ、ろくろに向かい合ってきた。
つまり、静の中の動を「永遠のテーマ」にしたのだ。

掲載の『瑠璃釉壺』は、卵形の器体に鋭い鑄(※2)の線を走
らせ、深い釉薬に緊迫の動性を刻んだ。壺は胴体を膨らませ
る位置で変化を決定するが、この作品は上下均等の絞りでフォル
ムが安定し、釉薬もまたしっとりと七宝にも似た輝きを放つ。

『青白磁錐』は、単純明快な三角形で、小さな口は一輪挿しに
なり、オブジェとしての魅力も十分。切れ味のよい大鉢や小物
のカップまで、磁器はすべて神経の行き届いた端正な作り。凛
として清冽な造形が、さらにどう展開するのか期待される。

※1 前田昭博＝鳥取市河原町在住。2013年に重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定。

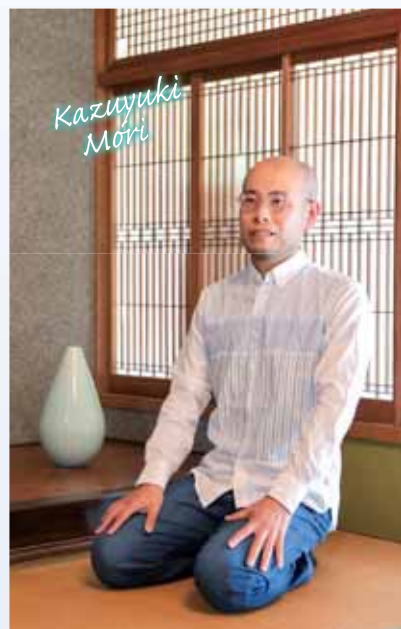
※2 鑄＝刀身の刃と棟との間の山高くなっている部分



『瑠璃釉壺』(磁器、高24.0×径19.0cm)

凛として清冽な造形

陶芸 森和之



もり・かずゆき

1979年生まれ。2004年、大阪芸術大学工芸学科陶芸コース卒。06年、前田昭博さんに師事。11年、鳥取市青谷町に築窯。日本伝統工芸中国支部展で鳥取県知事賞、日本工芸会賞など受賞。日本工芸会正会員。



《龍巻》1929年：鳥取県立博物館蔵

愛^あふれる “芸術写真の神”

昭和を翔^かけた写真家・塩谷定好

TEIKO SHIOTANI

豊かな情感で世界を魅了

大正～昭和期に、鳥取県の写真界を牽引していた塩谷定好（本名・さだよし）。

ただの記録ではなく、芸術の域まで高めた

「芸術写真」の手法で数多くの名作を生み出し、

世界的な写真家・植田正治^{うえだ しょうじ}をして「神様のような存在」と言わしめた。

新しい時代の波にのまれ、いつしか“幻の写真家”となっていたが、
海外で高く評価されたことをきっかけに、日本でも再び脚光を浴びている。

文／鳥飼 明子 写真／田中 良子



《海辺村童（竹馬）》1924年：個人蔵

モノクロームのソフトフォーカス（※1）、やわらかな輪郭と濃淡で表した情景の中に古さと新しさが同居し、喜びや悲しみ、不安、驚嘆、郷愁など、人の感受性をさまざまに揺さぶる。見る者の想像力をかき立て、時には鮮やかな色彩すら感じさせるような独特の軟調描写。それが写真家・塩谷定好（1899～1988年）の作品だ。

赤碕村（現・琴浦町）の廻船問屋・塩谷家の長男として生まれた。祖父の久次郎は、米の仲買業に加え、赤碕町長を務めた。また父・長一は、鉄道開通に伴い赤碕駅前で運送業を営みながら、商工業関連の役職も担った地元の名士だ。

そんな名家で育った定好は13歳（1912年）の頃、単玉レンズの

ヴェスト・ポケット・コダック（1912年、イーストマン・コダック社）：個人蔵



米国製最新カメラ「ヴェスト・ポケット・コダック」（以下、ベス単）を父に買ってもらう。その名のとおり、ベストのポケットに入るほど小型で軽量だ。これをきっかけに、写真の世界にのめり込んでいった。

大正～昭和初期にかけて日本の写真界は、「芸術写真」と呼ばれる表現が一大ブームに。欧米で広まった写真を絵画と同等の芸術の域まで高

13歳で手にした最新カメラ



定好45歳、三朝温泉の旅館：島根県立美術館蔵

める「ピクトリアリズム（絵画主義）」が、日本で独自に発展した。その流れの中で定好も、レンズの前にある絞りのフードを取り外して軟焦点（※1）にする「ベス単のフード外し」という手法を駆使し、数々の作品を生み出していく。家業を継ぐべき長男ではあったが、「自分の進むべき道は写真」と決め、よどみなく突き進んでいった。

※1ソフトフォーカス（軟焦点）：特殊なレンズやフィルターを使い、被写体の像を柔らかにぼかしたように表現する技法



《登山者》1933年：島根県立美術館蔵



《朝顔》1932年：島根県立美術館蔵

脚光浴びた

絵画的センス

当時は全国各地で、写真愛好家が集まって写真団体を結成していた。19年、定好も同好の士を集めて「ベスト倶楽部」を創設、月例会や撮影会、展覧会などを開催して写真活動に力を注ぐ。次々に創刊される写真雑誌の月例懸賞にも、積極的に作品を投稿。25年には、初めて全国誌『藝術写真研究』に作品が掲載される。

塩谷定好研究の第一人者、島根県立美術館主任学芸員の葛谷典子さんは、『《静物》』という作品を見たとき、なんて洗練されているのかと驚きました。光の当たり方が美しく、構図はポール・セザンヌの静物画のよう。明らかに絵画も学んでいる」と、感動を口にした。定好は幼い頃から絵が得意で、画家志望でもあったという。隠れた努力、天性の美的センスも作品に反映されているのだろう。

定好の作品が掲載された数々の冊子



『藝術写真研究』創刊号（1922年5月、アルス）：島根県立美術館蔵
『アサヒカメラ』創刊号（1926年4月、朝日新聞社）：塩谷家蔵（鳥取県立博物館寄託）
『カメラ』創刊号（1921年4月、アルス）：島根県立美術館蔵
『フォトタイムス』2月号（1930年、フォトタイムス社）：島根県立美術館蔵
[写真左から]

これを皮切りに作品の評価は上がり、毎号のように掲載される。26年には「第1回日本写真美術展覧会」で、島根県の小さな漁村・沖泊を撮影した《村の鳥瞰》が入選。また同年、写真雑誌『アサヒカメラ』創刊号の月例懸賞では、『《漁村》』が1等に。「植田正治（境港市出身／1913～2000年）が、塩谷さんを『神様』と称したゆえんの一つ。植田さんは、この初受賞を自分のことのように興奮しながら、回顧していた。それくらいすごいことだったんですよ」（葛谷さん）

《波止場雪景》1927年：島根県立美術館蔵



《婦人の像》1926年：島根県立美術館蔵

定好はこの頃、結婚して子宝にも恵まれ、公私ともに順風満帆だったが、次男・玲二が誕生からわずか3カ月で亡くなる。深い悲しみから、地元の菩提寺である海蔵寺^{かいぞうじ}に救いを求めた。宗教を学び、芸術との共通点を探るうち、住職や子どもたちを撮り始める。小坊主の1人に、寺に來たばかりの15歳の少年もいた。言いやうのない寂しさが目に宿っており、「それが塩谷さんをひき付けたでしょう。命を捉える」ことに集中していったのだと思います」と

《少年》1929年頃：島根県立美術館蔵



※2 新興写真＝カメラやレンズによる機械の特性を生かして、写真独自の表現を目指した動向。1930年前後の日本で盛んになった。それまでのビクトリアリズムとは異なる動きとして注目を集めた。

薦谷さん。こうして名作・小坊主シリーズが生まれていった。
また、赤碕の海とそこで暮らしを営む人々を写した作品も心を打つ。ある日は荒々しく、ある日は温和で優しい。毎日見つめるからこそ、繊細な変化や感情を描写できるのだろう。薦谷さんも「自然を見る目、感覚、思考、それを表現する深度が果てしなく、芸術写真全体の中でも群を抜いている」と心酔する。
隆盛を極めた芸術写真だったが、30年代になると「新興写真」(※2)へと転換していく。さらには戦争が暗い影を落とし、定好の写真活動も困難に。写真界から塩谷定好の名が徐々に消え去っていった。

写真集発刊を機に再評価

戦後の再評価は、初の写真集『ALBUM 1923〜1973 塩谷定好名作集』の発刊(75年)が起爆剤となった。植田正治と地元有志の後援会が後押ししたものだ。78年、來日していたキャノン・アムステルダム・ギャラリーの館長、ロレンツォ・メルロが、この写真集を目にした。強い感銘を受けたことで、翌79年にイタリアで開催された「今日の日本の写真とその起源」展で、異例の50点もの定好作品が並んだ。同展は、その後ヨーロッパ主要都市12カ所で巡回され、一大センセーションが巻き起こった。

さらに、82年の世界最大規模のフォトキナ写真展(西ドイツ)では、18人の写真家の中から日本人で唯一選ばれた上、「フォトキナ荣誉賞」を受賞。このことで日本でも再び注目され始めた。

その数年後の88年10月、定好は89年の生涯を終える。枕元の愛機たちに見守られながら。



再評価のきっかけとなった初の写真集『ALBUM 1923〜1973 塩谷定好名作集』(1975年、日本写真出版)と『塩谷定好写真集 海鳴りの風景』(1984年、ニッコールクラブ)

フォトキナ写真展の受賞式に代理出席した孫の塩谷晋^{しんむ}さんは、「評価されるのは死んでからだだと、祖父はいつも言っていた。時を経てじわじわと評価が上がってくるのが本物の芸術家」と、祖父の仕事の素晴らしさを確信している。
名作集に「自然のこころを、わたしの心として写すことに専念してきた」と言葉を寄せた塩谷定好。作品に宿るその「こころ」を、私たちもまた自分の心に重ねてみたい。

《蓮》1937年：個人蔵



神話とされる精巧な技 【蠟燭油煙修整】

芸術写真には幾つかの流れがあるが、定好が所属した日本光画協会は、焼き付けの際に印画紙を丸めて縦横に伸ばす「デフォルメーション」や、印画紙にメディウムを塗布し、油絵の具を塗りつけたり布で拭き取るなどして彩色やトーンを調整する「雑巾がけ」といった手法を施し、作者が表現したい心象を追求する作風であった。

その中で定好は、「蠟燭油煙修整^{ろうそくゆえんしゅうせい}」という独自の方法を編み出していた。それは、蠟燭の火を白いタイルにかざして霧^{かぎり}を取り、黒・青・セピアの油絵の具に少量混ぜて色を調整するというもの。蠟燭の霧は粒子が非常に細かい上、黒の色が深く、印画修整に適しているのだという。細かい部分は先端に脱脂綿を巻いた爪楊枝を使って塗り、濃すぎた場合はぬぐい取って色を整える。2晩ほど置いて乾かした後、仕上げは、筆に蠟燭霧だけを付けて補正。定好はその手法を、代表的な作品《三人の小坊主》《天気予報のある風景》を例に写真雑誌の特集などで詳しく説明している。

《天気予報のある風景》1931年：島根県立美術館蔵



「2cm四方を仕上げるのに丸1日かける」という塩谷神話が残っているほど、制作のこだわりは果てしない。こうして生み出された繊細かつ深みのある霧が、定好の美しい印画の秘密だ。それは時に悲しみを表し、時に温かく優しく心に染みる。

定好が最後まで
使っていた愛機



塩谷定好年譜

1899年	10月24日、鳥取県赤碕村(現・琴浦町)に廻船問屋を営む塩谷家の長男として生まれる。
1906年	塩谷家住宅が建てられる。(現在の「塩谷定好写真記念館」)
1912年	鳥取県立農学校(現・鳥取県立倉吉農業高等学校)進学。この頃、カメラを父親に買ってもらう。
1913年	鳥取市に芸術写真の同好の士が集まり、「写真クラブ」を結成。やがて、定好も参加するように。同クラブが後に「光影倶楽部」(1919年結成)となる。
1917年	鳥取県立農学校卒業。同郷の画家・前田寛治に憧れつつも、自身は写真の道に進む決意をする。
1919年	10月、芸術写真グループ「ベスト倶楽部」を創設。月例会・撮影会・年1回の展覧会・総会など、その後精力的に活動を展開していく。
1925年	8月、写友4人と島根半島に撮影旅行へ。その成果は翌年の各写真雑誌に次々と掲載されていった。
1926年	『アサヒカメラ』創刊号で募集された第1回月例懸賞に、島根半島の沖泊を撮影した《漁村》が第四部一等を獲得し、注目を浴びる。
1927年	3月に次男・玲二死去。深い悲しみから海蔵寺に通うようになる。
1928年	「日本光画協会」が結成され会員となる。
1930年	《三人の小坊主》が『藝術写真研究』に掲載され、全国の写友を魅了する。
1931年	「独逸国際移動写真展」(7月、東京・大阪)開催。この頃から、新興写真が急速に広まっていく。
1934年	「第1回中国写真美術展覧会」(12月、赤碕尋常高等小学校)開催。ベスト倶楽部主催で、中国5県と兵庫県から714点もの作品を集めた。
1938年	「ベスト倶楽部」を「写研会」と改名。
1945年	8月15日終戦。このとき定好は46歳。
1971年	「塩谷定好作品展」(9月、赤碕町)開催。約200点出品。「塩谷定好回顧展」(10月、米子市)開催。
1975年	『ALBUM1923～1973 塩谷定好名作集』(監修:植田正治、発行:日本写真出版、米子)発行。この写真集が再評価の契機となる。
1979年	定好80歳。「今日の日本の写真とその起源」展(1～2月、ポーロニャ近代美術館、イタリア)で作品50点を出版。同展はその後、欧州主要都市12カ所を巡回。
1982年	フォトキナ写真展「写真1922～1982」(9～10月、ジョセフ・ハブリック美術館、西ドイツ)開催。定好がフォトキナ栄誉賞を受賞。
1983年	日本写真協会功労賞を受賞。「塩谷定好・植田正治写真展」(11月～翌年8月、鳥取、倉吉、米子)開催。第1回地域文化功労者文部大臣表彰を受ける。
1984年	「ニコソロンブックスー10 塩谷定好写真集 海鳴りの風景」(監修:三木淳、発行:ニッコールクラブ)発行。
1988年	「フォト・フェスト'88」(2～3月、ヒューストン・センター、アメリカ)で「植田正治・塩谷定好回顧展」開催。海外での初個展「塩谷定好写真展」は、その後アメリカ国内7会場を巡回。10月28日、定好は89歳の生涯を閉じる。
2014年	4月、「塩谷定好写真記念館」が開館。



《破船》1929年:個人蔵

自然や生きものへの 思い豊か 孫の塩谷晋さんが語る祖父

「写真への想いは熱く、普段は穏やかで優しい祖父でした」と晋さん



親愛の情にあふれた笑顔で見つめ合う孫と祖父の写真。家族だけに向ける心を許した表情だ。「これが一番いい写真」と、孫の塩谷晋さんは祖父の定好に撮ってもらった写真を少し照れくさそうに見せてくれた。

この頃はすでに、写真家として脂の乗った時は過ぎていた。毎月のように写真雑誌の懸賞に入選していた若い頃の活躍を、晋さんは知らない。しかし、同じ屋根の下に暮らしていた祖父は、やはり〴〵写真職人。だったという。

鳥取県展や、所属していた新協美術展が近づくとき徹夜で作業、手の爪はいつも現像液で黄色く変色していた。写研会の毎月1回の例会では夜更けまで写真談義が続き、祖父が話す言葉が隣の部屋にいた晋さんの耳にも届いた。「何も遠くに行つて写すことはない。題材は身近にある。その中に美を見つけ出す感性を磨くことが重要」と。



晩年、定好が毎日のように海を眺めていた場所

ある秋の日、庭の柿を晋さんがもぎ取ろうとした時、「全部取ってしまうなよ」と祖父が声をかけた。「庭に来る鳥のために少し残しておけ」という意味だった。自然に対する畏敬や愛情が伝わるエピソードだ。

元気な時は大山や鳥取砂丘などにも出かけていたが、足腰が弱くなってからは自宅2階の窓から、赤碕の海の写真を撮っていたという。最晩年も病床の枕元にカメラを置き、フィルムは入っていないとも「シャッターは毎日押さんといけん」と話していたそう。晋さんは「素振りと一緒になんでしょうね」と微笑しながら、その瞳に写真に命を懸けた祖父への敬慕を浮かべた。

夢の翳りに命宿る

「定好作品は奥深く、まだまだ研究の途中です」と塩谷さん



島根県立美術館主任学芸員 薦谷 典子

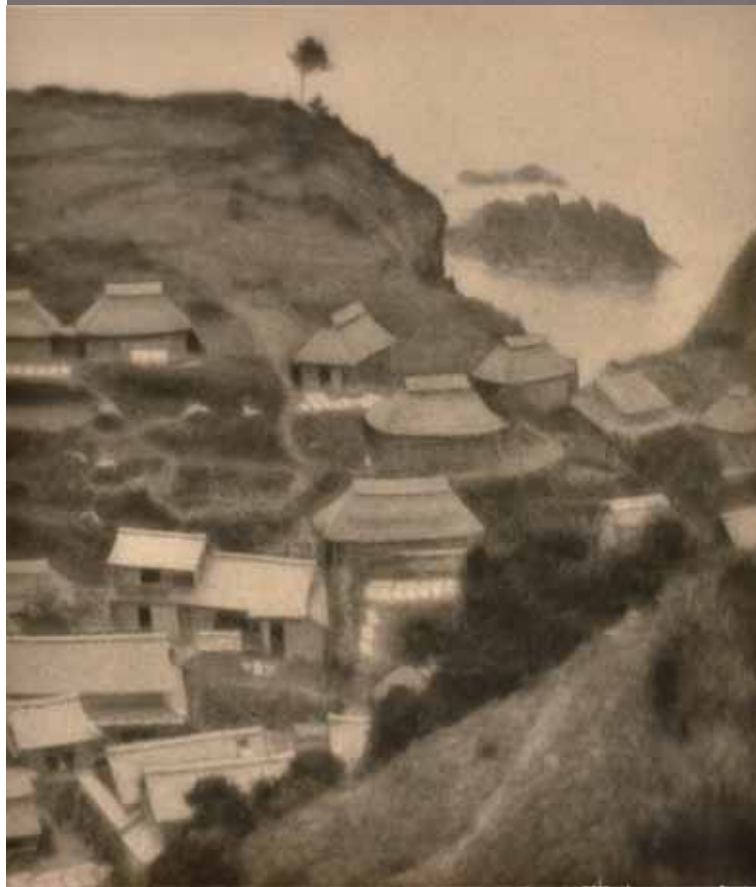
塩谷定好の写真

1925年8月3日～6日にかけて、写真家・塩谷定好は島根半島に滞在した。写友4人とゴザを抱えてひたすら歩き、美保関から七類、沖泊、小波、加賀とめぐっている。とりわけ、海に面する断崖に囲まれた多古鼻の沖泊の集落は、塩谷を魅了した。すり鉢状の斜面に建つ藁や瓦の屋根並みは様々な方向を向き、湾曲する道はくねくねと海に続く。まるでおとぎ話のひとこまのような風情である。塩谷は危険も顧みず崖によじ登り、夢中になって撮影していった。25歳の夏だった。

この年の暮れに同郷の憧れの画家・前田寛治(1896-1930)がパリから帰郷した。パブロ・ピカソとジョルジュ・ブラックが南フランスのレスタックで編み出したキュビズムの手法で、パリの屋根並みを描いた作品を含む帰国展(12月5日・6日)を開催している。前田が画家の道を進むなら、自分は写真の道を行くと邁進していった塩谷は、これらの作品に感銘を受けたに違いない。夏に撮影した沖泊の屋根並みは、多方向から見た対象の形態を統合し立方体に還元するキュビズムの手法を取り入れた見事な画面構成で仕上げられ、翌年の写真雑誌を席卷した(A)。塩谷は洋画壇の前衛的な傾向を果敢に取り入れていったのである。

翌1927年に次男・玲二を亡くした塩谷は、悲しみの淵で菩提寺の海蔵寺に通い思索を続けた。そして、生きとし生けるものすべての「命」の輝きの尊さを悟っていく。写すものの外形を追うだけではなく、「被写体の内部に潜んだ生命を掴む」ことに専心しなければならない(B)。「自然の生命を自分に通し自分の生命を自然に通す、自然と自分とが渾然として一つになるという域に至らねばならぬ」という境地に到達していった。↗

C 《村の鳥瞰》1925年：島根県立美術館蔵



↘ この自然観照の深さが塩谷の核となる。塩谷の自然観察は、じつに精緻で、かすかな変化にも鋭敏に反応する。萌え出る草花や、葉末を揺さぶる微風、虫の音や葉音に「春は眼の天地、夏は肌の天地、而して秋は耳の天地」と、五感を研ぎ澄ませて自然を感得し、詩情豊かに表現していく。

やがて、塩谷は10年近く前に撮影したネガを使って記憶のなかの光景を蘇らせる作品群を生み出す(C)。それは夢のなかのように、ほの明かりに浮かぶ中心部はいくぶん鮮明であるが、周りにはあわあわとした霏に覆われ、浮遊する翳の濃淡が美しい陰影を作り上げている。翳が形を作り、夢幻の世界を創り上げ、情趣に富む深遠な心象風景へと深化している。翳は、貴人に翳す羽根の覆いに由来している。命の輝きを包む塩谷の翳は、得も言われぬ深い情感に満ちている。記憶のなかの光景が命を宿しはじめる。

生涯にわたり、山陰の自然とそこに生きる人々をこよなく愛し、写真に情熱を傾けた塩谷定好。親子三代にわたり散逸することなく守り抜いた比類のない塩谷芸術をこの地で味わうことのできる幸せに感謝したい。



A 《漁村》1925年：島根県立美術館蔵



前田寛治作：《街の風景》1924年、鳥取県立博物館蔵



B 《三人の小坊主》1929年：横浜美術館蔵

塩谷定好写真記念館

日本海に沿って続く赤碕の旧街道は、昔ながらの静かな佇まいが今も残る。その一角、古い格子戸の凜とした美しさを放つ町屋が「塩谷定好写真記念館」だ。定好の生家や隣接する蔵を改築したギャラリーで、最盛期の著名なものから、秘蔵作品まで約25点が展示されている。蔵の2階は戦後、定好が写真館を営むために改装し、撮影スタジオとして使用されていた。オブジェや幼児用いすが残っており、来館記念にここで写真を撮る人も多い。

廻船問屋として栄えた往時を思わせる建物は、2015年11月に国の登録有形文化財(建造物)に登録された。主屋の広い土間、床の間も見どころの一つで、特に2階は鉄刀木(※3)の床柱、螺鈿細工が施された違い棚など、意匠を凝らした造作が見事だ。海側の窓から見えるのは赤碕の海と菊港。定好が毎日のように眺めていた風景、通り抜ける潮風を同じ場所で体感できる。

※3 鉄刀木＝紫檀・黒檀と並び三大唐木の一つで、硬く重い希少で高価な銘木

作品とリンクする
重厚な建物と風景

撮影スタジオとして使用されていた2階の一角



玄関を入ると広々とした土間。柱や梁も見応えあり

☎ 塩谷定好写真記念館
 所 東伯郡琴浦町赤碕1568
 ☎ 0858-55-0120
 時 9:00～16:00
 ※新型コロナウイルス感染防止対策のため、現在は9:00～14:00
 料 一般300円(中学生以下無料)、
 団体(15名以上)200円
 休 火曜日
 WEB <http://teiko.jp>



一息つける併設の喫茶

〈展示情報〉

前期・後期と年2回企画展を開催。

後期企画展「モノクロにみる色彩」

2021年10月6日(水)～2022年3月28日(月)

フジフィルム・フォトコレクション特別展
 「師弟、それぞれの写真表現」
 2021年10月20日(水)～12月28日(火)
 フジフィルムスクエア(東京都港区赤坂9丁目7番地3号)／入場無料

富士フィルム収蔵の日本を代表する写真家の作品の中から28人を厳選。そのうち鳥取県出身の5人の写真家(塩谷定好、植田正治、杵島隆、田淵行男、岩宮武二)作品も展示される。

塩谷さんに、初めてお目にかかったのは、私の中学時代の終り頃か、あるいは、卒業した年だったかもしれない。境線・後藤駅の、あの駅舎から離れたプラットへ歩きながら、両手の指でつくったフレームを覗いておられたことを、妙にはっきり憶えている。京都から訪ねてこられた当時の日本光画協会会長だった山本牧彦先生を案内して、美保関へ向われる途中、誰方に紹介されて私が同行したのか、その点だけは覚えていないが、50年ぐらい昔のことであった。

その頃の塩谷さんといえば、雑誌の月例と、今ほど多くはないにしても、年間、何回かあったコンテストに、必ずといっていにくいらい、上位に名前を連ねておられて、私たちにとって、それは、神様に近い存在であった。

日本写真家協会会員・二科会会員 植田 正治



三木淳、塩谷定好、植田正治(1983年、左から)
 :『塩谷定好写真集 海鳴りの風景』所収

したがって、数々のエピソードが、写真する若いものの間で、まことしやかに伝えられ、引伸しから、制作、仕上げの段階での、今から思うと本当だろうかと思われるような秘技が、塩谷さんなら、キット事実がちがいないというような確信で、語りつがれていた。(アサヒカメラの1974年1月号拙文に掲載)

もうひとつ、当時の私たちに衝撃を与えた撮影姿勢も、この機会を借りて記しておこうと思う。それは雪の松江への撮影行のときで、天神町にあるMという材料店で、ベスト判のフィルムを2本購入され、あまり時間が経っていないのに引返してこられて、さらに2本持って出られたということを、店の主人が驚いて話したことで伝えられたのであろうが、なんでも、松江大橋を渡り切るのに、2本も撮ってしまわれたという。今の時代なら、それほど驚くことはないにしても、当時、ベスト半截判にして32枚を、あの橋の上だけで費いやされたことは、まことに驚異に近いことであった。↗

【参考文献】 『愛しきものへ 塩谷定好1899-1988』(蔦谷典子編、2017年3月、島根県立美術館発行)
 『夢の翳 塩谷定好の写真1899-1988』(蔦谷典子著、2019年10月、求龍堂発行)

山陰写真界の草分け的存在



《浴場小景》1929年：個人蔵



《鳥取砂丘》1923年：鳥取県立博物館蔵

今、わが山陰に、100に近いカメラクラブが存在し、若干の推移はあるにしても、常に数千名のカメラマンが、真剣に写真に取り組んでいて、その実力は、日本写真界においても、常に上位にあるという、この真実の底に、大先輩塩谷定好さんの大きな存在を忘れることはできない。私たちの実力は、勿論、当人の努力もさることながら、決して自分だけで築きあげたものではなく、この辺境の、しかも、中央文化圏から隔絶された地にありながら、営々として耕された肥沃な風土と、播かれた一粒の種から、花咲き実を結んだ、豊穡の世界があればこそではなかったか。

そこに伝統が生まれ、新しい芽が育つという。自然の摂理があればこそ先覚者、塩谷定好さんがいつも大きくクローズアップされなければならない。わが山陰写真界の草分けは、今なお、カクシャクとして撮りつづけておられる。われらの大先輩塩谷さんの画業、いや、写業と健康を、この地に育った全写真人で祝福したいと思います。

『ALBUM 1923～1973 塩谷定好名作集』
 (発行：日本写真出版、1975年10月)より転載

ここにこの

Human
Life



谷口

Taniguchi
Takashi

剛史

整備士(若桜鉄道)

「ポッポー!」。軽快な汽笛音が若桜駅に鳴り響く。構内に展示されている蒸気機関車(SL)は、観光客の人気を集め、いまや地元住民にとっても大切な存在だ。復活の立役者、谷口剛史さん(若桜鉄道株式会社)は独自で学んだ腕をふるい、全国各地のSLに新たな命を吹き込んでいる。

文/倉恒 弘美 写真/田中 良子

村を見守る鎮守の森

開運
おかげ
詣で

因幡と伯耆の神社

直径20mほどの小さな森。コロンとまるい形から「トトロの森」「ブロッコリー神社」との愛称も

客神社 別名:小原神社 南部町

青々とした稲が一面に広がるその中に、ひっそりとたたずむ小さな鎮守の森。あるいは石畳の長い参道の両側に樹齢数百年の巨木が立ち並ぶ広大な宮の杜。森に神社あり、神社に森あり。神社めぐりは森を歩く旅でもある。米子市から南へ10キロ、かつて城下町米子と国境に近い生山(日南町)を結んだ法勝寺街道の中ほど、法勝寺川と絹屋川に挟まれた小原村(現南部町原)。田んぼの真ん中の小さな丘に「客神社」は鎮まる。神社の祭神はオオナムチ。全国をめぐる国造りの大事業を行ったオオクニヌシである。大

正から昭和にかけて走った法勝寺鉄道(米子―法勝寺間)の駅名「大國」は、この祭神にちなんでいる。社殿は享保年間(1716～1736年)に建てられ、村にはこんな話が伝わる。丘の近くで畑仕事をしていた老婆に突然何物かが乗り移り、気を失った。そして、老婆は夢の中でこんなお告げを受けた。「私は、ここに祀られている神だが、雨雪の日に入る社がないので建てて欲しい。そうすれば村は栄えるだろう」。それを聞いた村人たちは社殿を建て、祭神にオオナムチとスクナヒコナを奉還した。

客神社の「客」とは、よその土地から招かれた「客神」のこと。スクナヒコナはオオナムチの国造りに同行し、医療や薬学の神として崇敬された。そのため境内の木の葉にたまった朝露を付けるとイボが治ると、参拝者が絶えなかったという。

文・写真/角田 治

病氣平癒
イボ落とし

ご利益

森の中に鎮座する祠(右)と鳥居脇にある常夜灯



冬になると雪に覆われ、一面が真っ白になる
★写真提供…菅野雄一



つのだ・おさむ グラフィックデザイナー。神仏探訪家。『山陰の神々 古社を訪ねて』(山陰の神々刊行会)など、神社にまつわる書籍の取材・執筆・撮影。

神社情報

西伯郡南部町原
0859-66-3404(賀茂神社宮司・野瀬千枝)

若桜駅の構内で出番を待つC12。
乗車体験などのイベントでは、県内外から
鉄道好きたちがどっと押し寄せる

「動いてこそ」と独学で奮起

若桜駅のすぐ近くの自宅で、毎日車両を見て育った。子どもの頃からの夢は「列車の運転士になる」。米子工業高等専門学校（米子市）に在学中の4年生の春、「若桜鉄道が社員募集中」と小耳にはさむ。「この機会を逃すわけにはいかない！」とあっさり中退。同社に採用され、働きながら資格を取って20歳で念願の運転士になる。

2007年、若桜鉄道に1台のSL「C12形167号機（通称：C12）」（1938年製）がやって来た。集客の起爆剤を目指し、兵庫県多可町の公園に展示保存されていたものを譲り受けた。しかし74年に廃車になって以降、整備は一切されていなかった。「これを動かしたい。頼む」。当時の同社専務が白羽の矢を立てたのが、谷口さん。運転士として13年のキャリアを積んでいたころだった。

格闘の日々の幕開け

当時の若桜鉄道は経営の危機にひんしていた。窮地を脱却すべく観光化路線にかじを切り、C12は

その突破口だった。同社に整備士を雇う余裕はなく、谷口さんは「やるしかない」と腹をくくる。しかしSLの修復整備の知識はなく、身近に詳しい人もいない。やるのは自分ひとり。格闘の日々が幕を開けた。

幼い頃からモノの仕組みには興味があった。大人になってもそれは変わらず、職場の電気配線、パソコン環境の整備などを、独自で調べてクリアしていた。とはいえ、今度の相手はかなりの強者だ。運



転士の仕事をしながら、時間を見つけては古本屋で入手したSLの専門書を読みあさり、気の遠くなるような作業に少しずつ手を付けていった。

C12は若桜鉄道と若桜町、有志によるSL保存会などが主体となって誘致し、町民の募金で若桜町までの輸送費を賄った一大プロジェクト。それだけに不安と重責で押しつぶされそうな日々だった。「このボロボロSLを本当に動かせるのか…」

たにぐち・たかし

1974年若桜町生まれ。国立米子工業高等専門学校を経て、若桜鉄道株式会社に入社。2007年、社運をかけて兵庫県多可町から誘致した蒸気機関車を動かすように社命を受け、同年、圧縮空気による動態復元に成功。全国でも数少ない圧縮空気による動態化手法を受け継ぐ。

重責を乗り越え、

命吹き込む

心支えた恩師の言葉

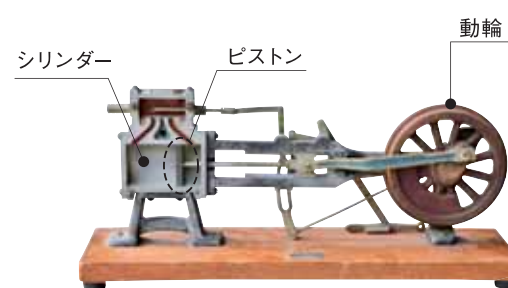
その心を支えたのは、元国鉄の蒸気機関士だった恒松孝仁さん。石炭を燃やして蒸気で動かすのではなく、蒸気の代わりに圧縮空気によってSLを動かす技術を確立した人だ。

C12の到着後、点検のために来町した恒松さんが放ったひと言は「大丈夫、動くよ」。その言葉が唯一、谷口さんの希望の光だった。恒松さんに何度も電話をかけてアドバイスを求め、全国の元SL運転士たちとも交流し、当時のことを教わった。何日も図面とにらめっこしたまま進まない日もあれば、突然パツと答えが舞い降りた日も。替えの部品が手に入らないため、小さなバネひとつでも落とした時は、地面にはいつくばり、見つかるまで探した。

汽笛音で町に活気

徐々にSLの仕組みを紐解き、格闘すること3カ月、試運転に見事成功。谷口さんを採用した当時の専務は、「おうた子（背負った子）に窮地を救われた」と言葉を漏らし、C12の古巣である多可町の人たちは同町を訪れ、走る姿を見て感動の涙を流した。

谷口さんは「観光客が増えて町の雰囲気も変わりました。苦労が報われた」と喜ぶ。若桜駅構内での体験運転は人気を集め、2015年には本線を試験走行することもできた。



SLを動かす仕組みを表した模型。ボイラー内で発生した蒸気（現在は空気）がシリンダーへと送られ、中のピストンが左右に動くことで蒸気を送り出し動輪が動く



レトロモダンな雰囲気が漂う若桜駅

その翌年、恒松さんが不慮の事故で急逝。現在、谷口さんは恒松さんの後継者として、全国のSLの整備や定期展示運転を引き継ぎ、各地を飛び回っている。

SLは迫力ある姿とは裏腹に、内部は精密機械のように繊細なため、C12の整備も常に欠かせない。「動く姿をみんなの記憶に残したい」と、わが子を慈しむように今日も黒いボディと対話する。



澄んだ流れの中にフライを打ち込む。大きくしなる竿に、魚たちの確かな生命力を感じる。フライ(毛ばり)フィッシングは、魚たちとの優雅な戯れ。その質を左右するのが竿。バンブーロッド職人の石田秀登さん(66)が手掛けるオーダーメイドの竿は『カゲロウロッド』として、全国のフライフィッシャーたちの憧れの存在だ。

バンブーロッド職人 石田 秀登

豊かな山河に囲まれて育った石田さんは、子どもの頃から竹やぶで切った竹を竿に、川で魚釣りをして遊んでいた。社会人になって趣味でフライフィッシングをするようになり、32歳の時に初めて竹竿を手づくりする。最初に完成した1本が折れたことが悔しくて、自己流で作り方を試行錯誤するうちに、その性能の高さが周囲の評判を呼ぶように。

脱サラを機に40歳で職人の道へ。最も特筆すべき竿の特徴は六角形の断面だ。竹を鉋で細く削り、一辺が約2.5^{ひでと}の正三角柱に形成した6本を接着して漆を塗る。削り具合が重要で、これが独特のしなりを生みだす。持ち手下部には、漆塗りの上に螺鈿(※)を施したものもあり、工芸品のような艶やかさも備える。

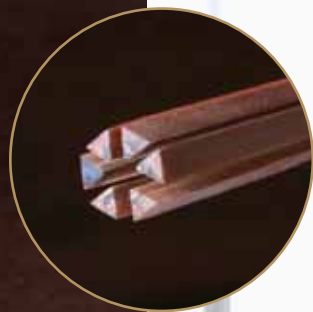
「竹は、魚の動きを竿を持つ手にやさしく伝えてくれる。川の中で魚と向かい合う瞬間は、何にも代えがたい」。自身が作った竿を手にも今も溪流釣りを楽しむ。その横顔は少年時代と変わらない。

※螺鈿=さまざまな貝殻の内側の光る部分を磨いて薄片にし、木地や漆地に埋め込むか貼り付けて装飾する工芸技法

文／井田 裕子 写真／田中 良子

腕一本で生み出した逸品

六角形の竿の断面。寸分たがわぬ正確さで、竹を一辺2.5mmの薄さに削り、正三角柱を作って接着する



漆を何度も塗って乾かす作業を終え、仕上げに鹿の角の粉で竿を磨く石田さん



漆塗りの上に箔(紙状の金属片)や螺鈿を施した持ち手の下部。工芸品のよう美しい

天井に吊り下げられた材料の竹。環境の変化などにより、年々、入手しにくくなっているという



MEMO

竿の材料は繊維が太くて強度の高い中国産。すべてのパーツが手作りで工程は100以上、1本の製作に約3カ月必要だ。個人の好みに合わせるため、リピーターが多い。価格は15万〜30数万円。フライフィッシングは、カゲロウなどの水生昆虫に似せた毛ばりを使う釣り。竹竿のしなりはカーボン製に比べ、釣られた魚の力を吸収できる。



☎ カゲロウロッド
〒 日野郡日野町中菅512-7
☎ 0859-74-0074
🌐 <http://www.kagerow.sakura.ne.jp/>

「顧客を思う心」でITの新分野を開拓

学校で、生徒と教師のコミュニケーションを助けるアプリ開発から、人工衛星が宇宙から届けるデータの分析まで——。ドリーム・オンライン株式会社は、顧客の期待に応えることを大切に、ITでの新分野を開拓、多様な仕事に取り組んでいる。

文／松村 亜紀子 写真／萱野 雄一

使う人の視点に寄り添ったアプリの数々。
寄せられた意見を聞きながら、改善することも



「いわゆる何でも屋さんかな」と代表の嘉賀雄一さん。以前勤めていたIT関連企業では「利益優先」の方針が合わず退社後、県外へ。その後米子市にUターンした際、知人に仕事の依頼を受け、2005年に一人で起業した。仕事量が増えるにつれ、次第に同士が集まり、2020年10月に株式会社になった。さらに取引先の幅が広がった。業務の三本柱は「ICTネットワークの構築」「ICT（※1）支援」「システム開発・ホームページ作成」。全国チェーンの小売店などのネットワーク構築や、大手メディアの動画配信サービス、学校現場ではICT技



ICT支援の一環として、小学校で情報通信技術を教える授業（2021年9月、日吉津小学校）
★写真提供：ドリーム・オンライン(株)

ドリーム・オンライン株式会社

代表取締役社長／嘉賀 雄一
設立／2020年10月
資本金／100万円
〒 米子市新開5丁目3-22
☎ 0859-30-3663
🌐 <https://www.dreamonline.jp/>

※1 ICT＝パソコンだけではなく、スマートフォンやスマートスピーカーなど、さまざまな形のコンピューターを使った情報処理や通信技術
※2 VR展示場＝VR（バーチャル・リアリティ）技術を使った展示システム。顧客はパソコンやスマホを使い、住宅展示場を歩いているかのように体感できる
※3 リモートセンシング技術＝物を触らずに調べる技術。人工衛星に専用の測定器を載せ、観測したデータを基に、分析・解析を行う

術のサポート。さらには、映画の製作に加わったり、ロケット観測のためNASA・アラスカ大学との共同研究で北極圏へ行ったり。想像を超える幅広さで、多様に展開している。これは、それぞれの丁寧な働きぶりが見込まれ、また違う分野へと誘われてきた結果のようだ。例えば、特別支援学校でコンピューターのメンテナンス中に、教諭に非常勤講師への勧誘を受ける。勤務中、「こんなアプリが欲しい」と聞けば早速、次々と開発。その実績から鳥取県が同社に依頼し、6年前から本格的に学校現場でのICT支援を手掛けている。

「楽しく仕事する」をモットーに挑戦、どんな仕事でも、まずは顧客や使う人の立場を考えてきた。ハウスメーカーのWEBページ製作では、山陰初のVR展示場（※2）を取り入れた。また、家の建築で顧客がWEB上で素材などを選択していくと、自動で見積もりができるシステムを作ると、メーカーの業績が伸びたという。このほか現在、取り組んでいるのは「家の空調の自動制御」や「人工衛星によるリモートセンシング技術（※3）の活用で海況を解析、漁業に役立てる研究」などだ。嘉賀さんは、「まだまだ、未知の面白いことが待っている」と目を輝かせている。

鳥取県農業試験場

〒 鳥取市橋本 260
☎ 0857-53-0721
🌐 <https://www.pref.tottori.lg.jp/nogyoshiken/>

より良い農業の継続へ生産者をサポート



VOL.6

古くから受け継がれ、日本の食卓の主役を担ってきた稲作。背景には時代と共に変わる生産・消費ニーズや気候変動などに合わせた品種の開発、栽培技術の研究がある。鳥取県農業試験場は「喜ばれる作物をより多く、省力、低コストで」をテーマに、さまざまなアイデアを駆使して生産者を支え続ける。

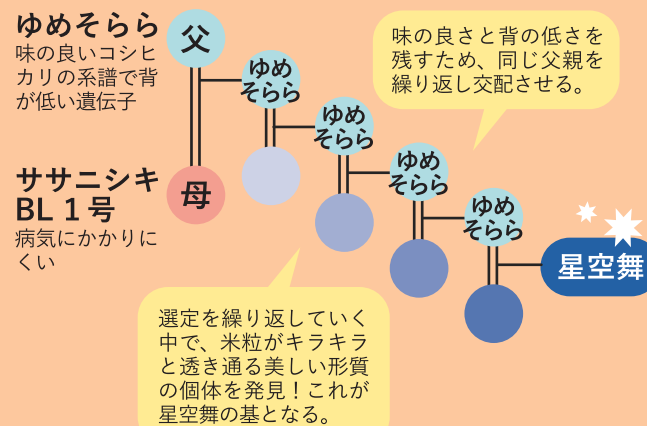
強くておいしい「星空舞」の誕生

コシヒカリ栽培での課題点

- ①背が高く収穫期に倒れやすい。
- ②病気にかかりやすい。
- ③近年の温暖化による夏の暑さで米の中心部が白く濁り価格が下がる。



新品種育成への道



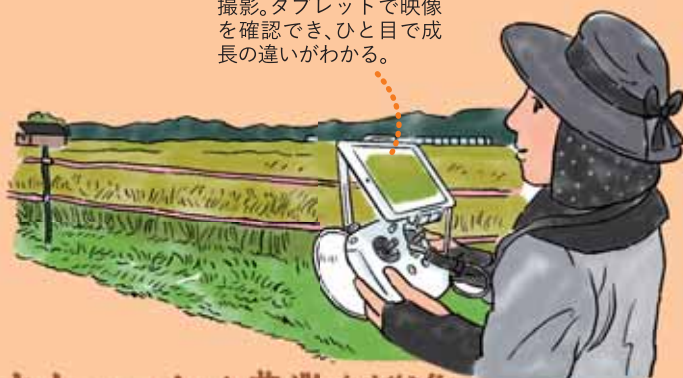
星空舞の特徴

- ①背が低く倒れにくい。
- ②病気にかかりにくい。
- ③夏の高温に強く品質が良い。
- ④収穫期がコシヒカリよりも遅く、作業が分散できる。
- ⑤味度値（※）はコシヒカリより高い。

※味度値＝米のおいしさの指標。



上空50mから田んぼを撮影。タブレットで映像を確認でき、ひと目で成長の違いがわかる。



未来へつなぐ農業を推進

ロボットやAI、情報通信技術で、作業の効率化を図る「スマート農業」の研究も進む。例えばカメラ付きドローンを使えば、田んぼごとの生育状況を素早く把握できるようになるほか、種子や追肥の上空散布も可能。農業の担い手不足や高齢化に対応する省力化、利益向上につながる方法を、あの手この手で模索している。

除草に貢献!? イトミミズの活用

田んぼに生息するイトミミズは、土の上に排出するフンで「トロトロ層」を作る。それは結果的に雑草の種子を覆い、発生を抑制することを明らかにしたのが、同場の「有機・特別栽培研究室」。環境にやさしい除草が効果をあげている。



通常より早めの3月ごろ、田んぼに水を入れてイトミミズを増やします。

室長の宮本雅之さん

文・イラスト／雲坂紘巳（くもさか・ひろみ）
納豆が大好きなイラストレーター。1982年生まれ、鳥取県育ち。づるづるした食べ物から、屋号は「スタジオづるり」。
WEB=<http://dururi.com>

森のガレージキノビ経営(智頭町)

小池 陽子さん

兵庫県尼崎市出身

- ◎ 家族構成／ひとり暮らし
- ◎ 移住前の住まい／兵庫県神戸市、ハワイ
- ◎ 移住時期／2016年5月
- ◎ 現在の仕事／森のガレージキノビ主宰、ヨガ・ダンスのインストラクター

森のガレージキノビ

所 八頭郡智頭町智頭1815-12

WEB <https://www.forestgaragekinobi.com/>



「町内が一望でき、抜群の見晴らしです」と小池さん。この場所でのヨガレッスンも計画中だ

本来の自分を見つめ より豊かな人生探る

チユラルフィットネスも展開。日常生活から離れて自分を見つめる時間をつくることで、また一歩を踏み出す力を得る。自身がハワイで体験したリトリートをここで提供したい考えだ。このような活動を通じ、都会や海外の人々に同町や県の魅力を知ってもらい、新たな人流を生み出す仕組みづくりを進めている。

「自らを振り返れない日常は、まるで冷たい雨に打たれているかのよう。雨上がりにかかる虹のような懸け橋を都会と地方の間にかけ、豊かな人生を送るお手伝いをしていきたい」。小池さんの笑顔は、ありのままの自分で、そのままの今を見つめて暮らす充実感にあふれている。



国指定重要文化財・石谷家住宅(智頭町)で「ヨガ&瞑想」のレッスンもあり ★写真提供:小池陽子

From
Kobe Hawaii

穏やかな時の中で、ゆるやかに周囲の人と

つながりながら、自然と共に暮らす。

「智頭町は、私が私らしくいられる場所」

と話す小池陽子さん。

都市部と地方に虹のような懸け橋をつくり、

豊かな人生を送るためのヒントを伝えている。



日常とは異なる空間で、心と体に目を向ける。やがて聞こえてくる、置き去りにしてきた気持ちや内側から響く声。小池さんが運営する「森のガレージキノビ」は、ヨガレッスンやワークショップなどを通して、自身とじっくり向き合う時間（リトリート）を提供する。

大手フィットネスクラブに勤めていた頃ヨガと出会い、退職後フリー

インストラクターとして、関西を中心に活動していた小池さん。今にたどり着いたのは、二つの場所との出会いがあったから。

一つは、家族旅行をきっかけに18歳から年1回訪れていたハワイ。最初は休暇を楽しみだけだったが、20代の中頃から長期滞在し、現地の人々と共に過ごすようになる。仕事と時間に追われ走り続け、心と体が悲鳴を上げたことがきっかけだった。ハワイでは、互いに「できること」を提供し合いながらも、自分の意思は明確に表す。「豊かな生き方とはこれか」と、大きな気づきを得る。

そして、もう一つが智頭町。同クラブに所属していた頃、「自然に触れる機会をつくってあげたい」と、

鳥取県東部を巡る親子ツアーを企画し、2005年頃から毎年、同町に訪れてきた。時間の流れがゆったりしていて、水も空気も食べ物もおいしい。住民たちの「おせっかいな人柄」も心地よく、ふと気付く。「ここはハワイと似ている。自分らしく生きられる」

16年に町の地域おこし協力隊員として移住、任期を終えた1年後の2022年2月、古民家を改修して「森のガレージキノビ」を開いた。

都会と地方の懸け橋に

「体」「心」「懸け橋」の3つのテーマを設け、完全予約制でパーソナルやグループレッスンの教室を開く他、森林や鳥取砂丘などで行うナ

VIVA
トリ
LIFE

輝くIJUターン者たち

文／井田 裕子 写真／山田 真実

「ハワイと同じかも」



古民家をリフォームしたキノビのレッスンスタジオ。ハワイで購入した布が壁に飾られ、温かい雰囲気が漂う

【IJUターンの相談窓口】

公益財団法人 ふるさと鳥取県定住機構

所 鳥取市扇町115-1
鳥取駅前第一生命ビル1F
☎ 0857-24-4740
WEB <https://furusato.tori-info.co.jp/>

IJUターン就職に関する相談

☎ 0120-307-238
(8時30分～17時15分 ※土日・祝日除く)

移住に関する相談

☎ 0120-841-558
とっとり移住定住ポータルサイト
WEB <https://furusato.tori-info.co.jp/iju/>

キュートな表紙にひかれ、手に取りました。森の生きものの話から、水産試験場まで、バラエティーに富んだ内容に大満足でした。特に県の試験場の仕事って、なかなか知る機会がなかったので、勉強になりました。イラスト入りの説明は、子どもたちにも親しみやすく、わかりやすくて良いですね。

(鳥根県出雲市 飯島 紀美)

表紙の華やかさに目を奪われ、手に取りました。開くと、写真も文面も構図も見やすく、あっという間に読み終え、また見返しました。今回の「見守りつなぐ森と生命」を子どもたちにも読ませたいです。拝読したことで、鳥取の良さを再発見できました。

(鳥取県米子市 伊東なごみ子)

巻頭特集「見守りつなぐ森と生命」に感動しました。普段あまり注目されない東部の山林地帯に、これほど豊かな生態系が、いまだ残されている事をうれしく思います。「響の森」「芦津モモンガプロジェクト」の活動に声援を送りたいです。

(兵庫県神戸市 房安 和則)

名前は何度も聞いたことがあっても、これまで一度も見たことがないモモンガ。民家がある場所から、それほど遠くない森にすんでいるなんてビックリ！鳥取県には、まだまだ豊かな自然が残っているのですね。

(兵庫県神戸市 村瀬 勲)

「ここにこの人」に掲載されていた能楽指導者・若川睦子さんの記事に感動しました。これからも頑張ってください。

(京都府京都市 谷川 隆一)

鳥の劇場の紹介記事が良かったです。立ち上げた経緯や場所は、以前から知っていましたが、活動内容や地域に対する影響などは知らなかったです。今回の記事で本当によくわかりました。ぜひ、行ってみたいです。

(鳥取県倉吉市 福田 昭子)

■応募方法

下記の項目を記入し、ハガキまたは電子メールでご応募ください。

- ① 希望の商品記号または商品名
- ② 掲載記事への意見・感想
- ③ 応募用クイズの答え
- ④ 住所・氏名・年齢・電話番号

※②の感想が次号の「voice」に掲載される場合、住所・氏名が明記されることをご了承ください。また商品の当選は、発送をもって発表に代えさせていただきます。

※お預かりした個人情報は、プレゼント発送以外の目的に使用することはありません。

●応募用クイズ●

Q 大正～昭和初期にかけて日本の写真界で、一大ブームとなった写真の表現方法の名称は何？空いている□に文字を記入してください。

□□写□

131号のクイズの答えは「イヌワシ」

■応募先

〒680-8570 鳥取市東町1丁目220
鳥取県広報連絡協議会(鳥取県庁内)
「とっとりNOW読者プレゼント」係
メールアドレス: now@kouhouren.jp

応募バッチ

2021.
12/31
消印有効

A



塩谷定好作品集

ポストカード (5枚入)

【3名】

世界的評価が高い写真家・塩谷定好の作品のポストカード。代表作の《村の鳥瞰》をはじめ、海外で人気が高い《浴場小景》、しっとり情緒を醸す《静物》などの5点セット。

問 塩谷定好写真記念館

☎ 0858-55-0120

星空舞 (2kg)

【5名】

炊いたご飯に光沢があり、適度な粘りと一粒ずつが跳ね返るようなしっかりした食感が特長。おいしさの指標とされる「味度値」が高く、冷めても味が変わりにくい。

問 鳥取県広報連絡協議会

☎ 0857-26-7086

B



C



温泉いちごバター

【3名】

しかの鹿野温泉(鳥取市)の源泉を利用して栽培した鳥取県オリジナル品種のイチゴ「とっておき」に、国産無塩バターを加えた。ジャムのようなとろりとした食感が魅力。

問 株式会社メイワファームHYBRID

☎ 050-3821-6929

Editor's note

□■編集後記■□

「子どもの頃からの夢だった」という谷口さん。まっすぐな瞳がまぶしい(17頁)。▼私が夢として記憶にあるのは、小学3年生で「アイドル」、6年生で「獣医」まで。高校生で現実に気付き、夢というワードは念頭から消えた。環境のせいではない。単に執着が薄かったせいだ。好きなものは数あれど、とことん、がない。取材では、いい意味で物事に執着が強い方が多く、その違

いを思い知るのだ。▼とはいえ、将来に惑う若人たちよ、悩み過ぎないで。「面白いかなあ」程度の勘だけで、この種の仕事に携わり30数年。悪戦苦闘しつつも、それなりにやりがいも見出ししてきた。夢がなくても、縁があった場所で、なんとか道は開けたのだ。社会では、執着より柔軟さが、求められることもある。▼なんで…えらそうに論じている場合じゃない。そろそろ次のステージ(老後)への惑いがふつつ。『不惑』の年齢定義は、かなり怪しいものだ(苦笑)【Hi】

